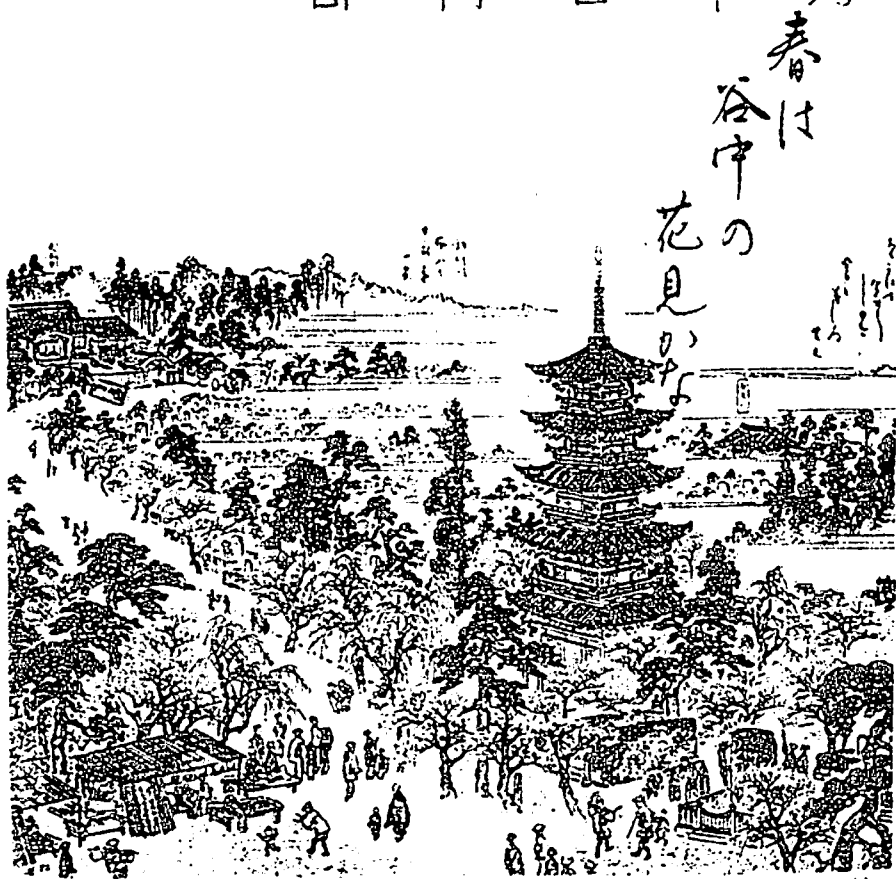


昭和61年4月29日(火)

第144回

史跡めぐり資料

都内谷中方面



春は
谷中の
花見の
かき

谷中 五重の塔

越谷市 郷土研究会

加藤 幸一

第144回 史跡めぐり

案内場所 都内 谷中方面

と き 昭和61年4月29日(火)

集 合 越谷駅前 午前8時40分

コース 越谷駅^{東武線}北千住駅^{千代田線}千駄木駅——伊勢辰
(江戸千代紙)——八び道(藍染川跡)——赤字坂
(あかぢ銀行)——大名時計博物館(館長による解
説)——領玄寺貝塚——天眼寺(忍藩主松平侯の寺)
——玉林寺(椎の木・海舟の虎の絵・昼食)——自
性院(愛染かつら)——西光寺(章然天)——谷中
墓地(高橋お伝・五重の塔跡・長谷川一夫・天王寺
大仏)——雲伴旧居跡——雲梅院(初音の森)
観音寺(四十七士)——寺まり歌のお仙(笠森稻荷・
大円寺の春信と荷風の碑)——全生庵(鉄舟の寺・
円朝の墓)——千駄木駅

昼食場所 玉林寺境内(室内)

食堂は善光寺坂を降りた根津駅周辺にあり

案内者 越谷市郷土研究会理事 加藤 幸一

目

谷中とは	ページ
1. 谷中の呼び名	2
2. 谷中の範囲	2
3. 縄文の頃の谷中	2
4. 江戸氏の頃の谷中	3
5. 江戸時代の谷中	3
6. 明治以降の谷中	6
史跡めぐり	
1. 文七	8
2. 伊勢一	8
3. 三崎坂	8
4. 伊勢辰	8
5. へびみち	9
6. あかざ山	9
7. 大名時計博物館	10
8. 領玄寺貝塚	10
9. 三浦坂	10
10. 天眼寺	10
11. 玉林寺	12
12. 善光寺坂	13
13. 田辺文魁堂	14
14. 一乗寺	14
15. 自性寺	14
16. 瑞輪寺	15
17. 西光寺	16
18. 七面山祖師堂	17
19. 面六	17
20. 伊勢五	17

次

21. いろは茶屋跡	ページ
22. 谷中墓地	17
23. 高橋お伝の墓	18
24. 長谷川一夫の墓	20
25. 谷中五重塔跡	20
26. 天王寺	22
27. 御殿坂	24
28. 片山哲旧居跡	28
29. 幸田露伴旧居跡	28
30. 北原白秋旧居跡	28
31. どうこ屋	28
32. 朝倉彫塑館	29
33. 霊梅院と初音の森	30
34. 観音寺の四十七士	30
35. 功德林寺の笠森稻荷	30
36. 観音寺の築地塀	30
37. 全生庵	31
38. 大円寺と笠森お山	32



[谷中とは]

谷中は震災前を思わせる古い家、墓石を刻む石屋があり、非常に寺が多いことに気づく。現在でも66くらいの寺が散在するが、昔は谷中八ヶ町に98ヶ寺あったという。典型的な「寺町」である。また、江戸の名残をとどめる職人さんの町でもある。

そこで、今回の史跡めぐりでは、午前中は谷中の移り変わりと職人の町の一場面をかいまみたり、大名時計博物館、越谷市と関接的に縁のある忍藩主の寺などを見学したいと思う。午後は笠森お仙関係の史跡を訪ねながら寺めぐりしたい。

1. 谷中の呼び名

「往古図説」によると谷中は昔は谷間の地で、駒込(北西)と上野(南)の中ほどにあるため、下谷(南東)に対して谷中と名づけたとしている。

また、藍染川(現在は暗渠となり、文京区と台東区の区境いとなっている)を境に、団子坂方面が本郷台(根津神社・東京大学などがある)、谷中方面が上野台(谷中墓地、上野の寛永寺、上野公園などがある)となる。この本郷台と上野台の間の低地の部分から谷中と名づけられたとも推定されているがよくわからない。

2. 谷中の範囲

現在は谷中は1丁目から7丁目までからなるが、昔は今の千駄木(西)、根津(南西)、桜木町(南東)や日暮里(北東)の一部なども谷中に含まれていた。つまり谷中と呼ばれる地域は今よりも広がったわけである。

3. 縄文時代の頃の谷中周辺

縄文時代の頃の人々は、けものや木の実などをとって食べてくらししていた。海の近くに住んでいた人々は魚や貝などもたくさん食べていた。その食べかすなどの捨てた場所、つまりゴミ捨て場を貝塚と呼んでいる。貝塚を調べると大昔の人々が食べた物や日常使用した物などが見つかり、その当時の生活がある程度推定で

きる。谷中には貝塚がいくつもある。領玄寺^{りやうげんじ}境内、谷中墓地、谷中銀座などである。

貝塚が谷中にあることから、そして縄文式土器が発見されていることから、谷中には何千年も前に人々がすでに住んでいたことがわかる。また、谷中のすぐそばまで海がせまっていたことも想像できる。

4. 江戸氏が治めていた頃の谷中周辺

藤原氏の勢力が衰^{おとろ}えるにつれ、地方の豪族江戸氏の支配下におかれていった。江戸重長^{しげなが}は源頼朝の挙兵を助けて「ハケ国^{あわ}（安房・上総・下総・常陸・下野・上野・武蔵・相模つまり今の関東地方にあたる）の大福長者^{だいふくちやう}（大金持ちで幸運に恵まれている人）」といわれるほどの力があつた。

その頃、本郷台と上野台の間の谷間に川が流れ、根津あたりから海に注いでいた。上野台の東側の崖下^{かき}（現在、山ノ手線が走っている）は浅い海であった。その海の遠方に浅草寺・鳥越^{とりのこ}（浅草橋の北）あたりが島になって浮かんでいたと推定されている。江戸という地名は海が陸地に入り込む入口という意味で、その当時の地形をよくあらわした地名である。また、団子坂はもと汐見坂とも呼ばれ、この坂から海が見えた地名の名残である。

なお谷中の地名が記録として最初に出てくるのは室町時代の享祿年間^{きやうりよく}（1528～31）で、「小田原衆所領役帳」に「江戸屋中」と記載されている。

5. 江戸時代の谷中

江戸時代^{えど}前の谷中には寺院が、鎌倉時代からの愿心寺^{のぞみ}（今の天王寺）、永祿元年（1558年）開基の善光寺（今はない）、善光寺坂の坂上^{のぼり}にあった）ほか二・三寺しかなかった。それが家康関東入国と前後して、大行寺、玉林寺が、ひき続き長明寺、一乗寺、また、本立寺、加納院、常在寺、養泉寺、妙雲寺、永久寺と次々に創建されている。

そして、寛永2年(1625年)の上野の寛永寺(上野公園全体が当時の寺域)の創建着手によって谷中は大きく変わる。つまり寛永寺創建にともない、その子院が寛永年間に谷中の高台に^{しん}あいついで^{ふたつ}建立され、谷中はすっかり寺町らしくなった。今も残る子院は円珠院、津梁院、浄名院、護国院、養寿院など。この期の寺院は、妙情寺、蓮華寺、養泉寺、安立寺、安立院、上聖寺など。

その上、慶安年間(1648~51)、江戸中心部が過密となったため、江戸市中の寺町は郊外へ移転命が出され、谷中には^{つんだ}神田から多くの寺院が集団移転してきたのである。その結果、谷中もますます寺町としての様相を帯び、寺の門前に門前町としての^{まち}町屋が次々とでき、町屋には小商人^{こあきんど}や職人が増えていった。この期の寺院として、総持院、大泉寺、法蔵院、金嶺寺、多宝院、自性院、了倪院、長久院、西光寺、観音寺、観智院、明工院、天龍院、仏心寺、本寿寺、妙行寺、領玄寺、瑞輪寺などである。

明暦3年(1657年)、三日三晩燃え続けた明暦の大火、世に言う^{おきな}振袖火事が起っている。江戸城天守閣(以後、再建されない)をはじめ、寺社、大名屋敷、町屋、橋など、せっかく完成した江戸の町をなめつくし、府内はほとんど焼けてしまった。ところが郊外の谷中は被害はなく、この時焼け出された寺々がこの谷中にも移転してきた。その寺々とは、延寿寺、大雄寺、妙福寺、瑞松院、臨江寺、長安寺、信行寺、福相寺、神田感応寺、本通寺、龍谷寺、立善寺、養伝寺、天眼寺、海蔵院、靈梅院、長運寺、宗林寺、大円寺、妙法寺、妙円寺、龍泉寺など。

元禄16年(1703年)、小石川後楽園から出火したいわゆる水戸様火事で谷中の寺もかなり焼失したが、復興する。

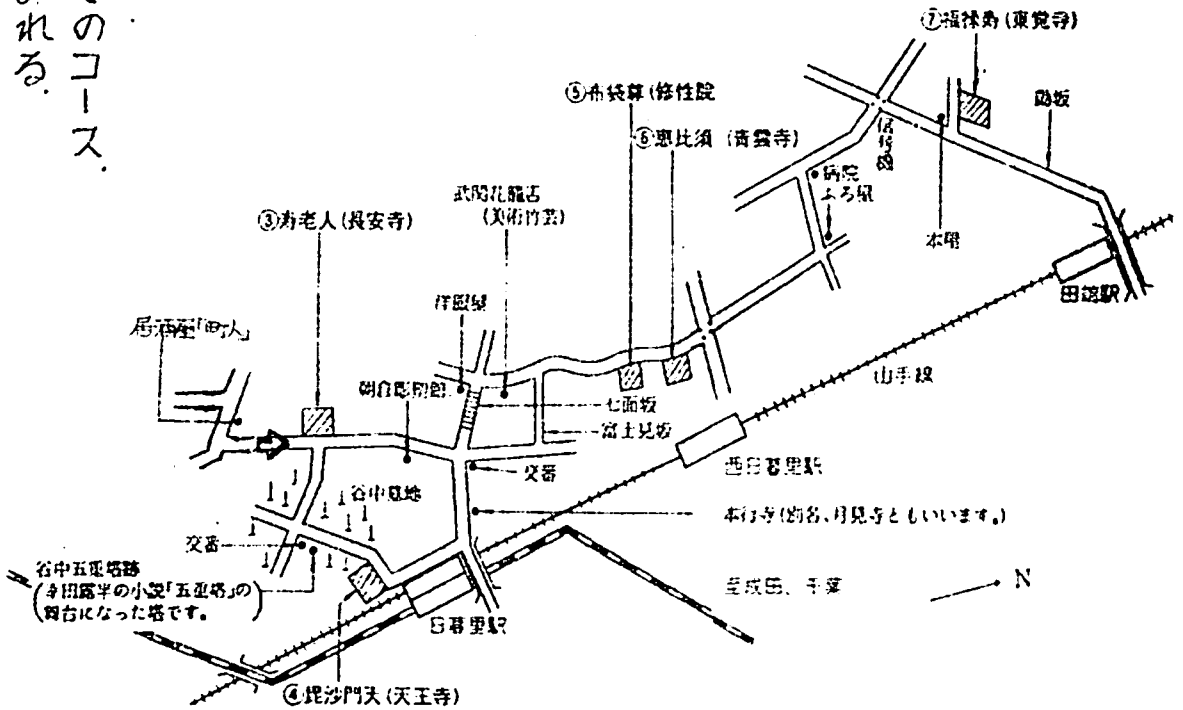
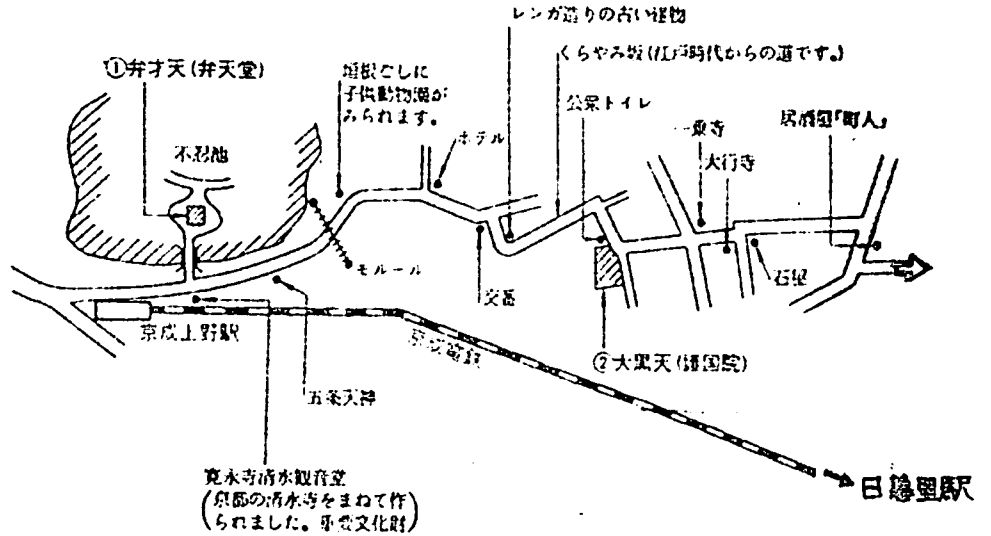
郊外の風光明媚の地である谷中は江戸庶民の寺社詣でをかねた格好の行楽地となる。七福神めぐりは谷中が最初とされているが、このような中でいつの日か^{しつじょう}物見遊山を兼ねた七福神詣でが起こったのであろう。

谷中七福神詣で

(道順) 京成上野駅→(3分)→弁天堂→(20分)→護国院→(17分)→長安寺→(6分)→天王寺→(4分)→日暮里駅→(12分)→修性院→(3分)→青雲寺→(16分)→東覚寺→(7分)→田端駅 ※全行程=徒歩1時間28分

右の地図中①～⑦までが七福神詣でのコース。当時の谷中の広さの一端がかいまみれる。

七福神詣で発祥の地



享保年間(1716~35)から谷中感応寺(今の天王寺)で當(今の宝くじにあたる)が売り出されると続々と町人がおしかけ、それにとまってお客をめあての水茶屋がさかんとなる。また、延享

年間(1744~47)には谷中は府内に仲間入りし、町奉行の支配下となる。そして、明和年間(1764~71)には、笠森お仙という絶世の美女が笠森稻荷の境内の水茶屋鍵屋に現われ、一層人々を集めた。こうして谷中にはにぎわいをみせ、風雅遊興の地として名声を高めた。明和九年(1772年)に起きた目黒行人塚火事で谷中は灰燼に帰すが、再度復興する。この火事は明暦以来の大火である。

6. 明治以降の谷中

上野の山(寛永寺)に立てこもっていた彰義隊に対し、谷中の寺々は寛永寺への義理立てもあって支持した。その結果、谷中も戦火にまきこまれ、助かったのは天王寺と五重塔ぐらいであった。

明治になると幕府の庇護を受けていた谷中天王寺は新政府の上地令により容赦なく大部分の境内を召し上げられ、谷中霊園と化した。また上野寛永寺の彰義隊がたてこもって抵抗した上野戦争の焼け跡はオランダ人のお雇い外国人ボードインの進言により明治6年、東京で初の公園(上野公園)として指定された。

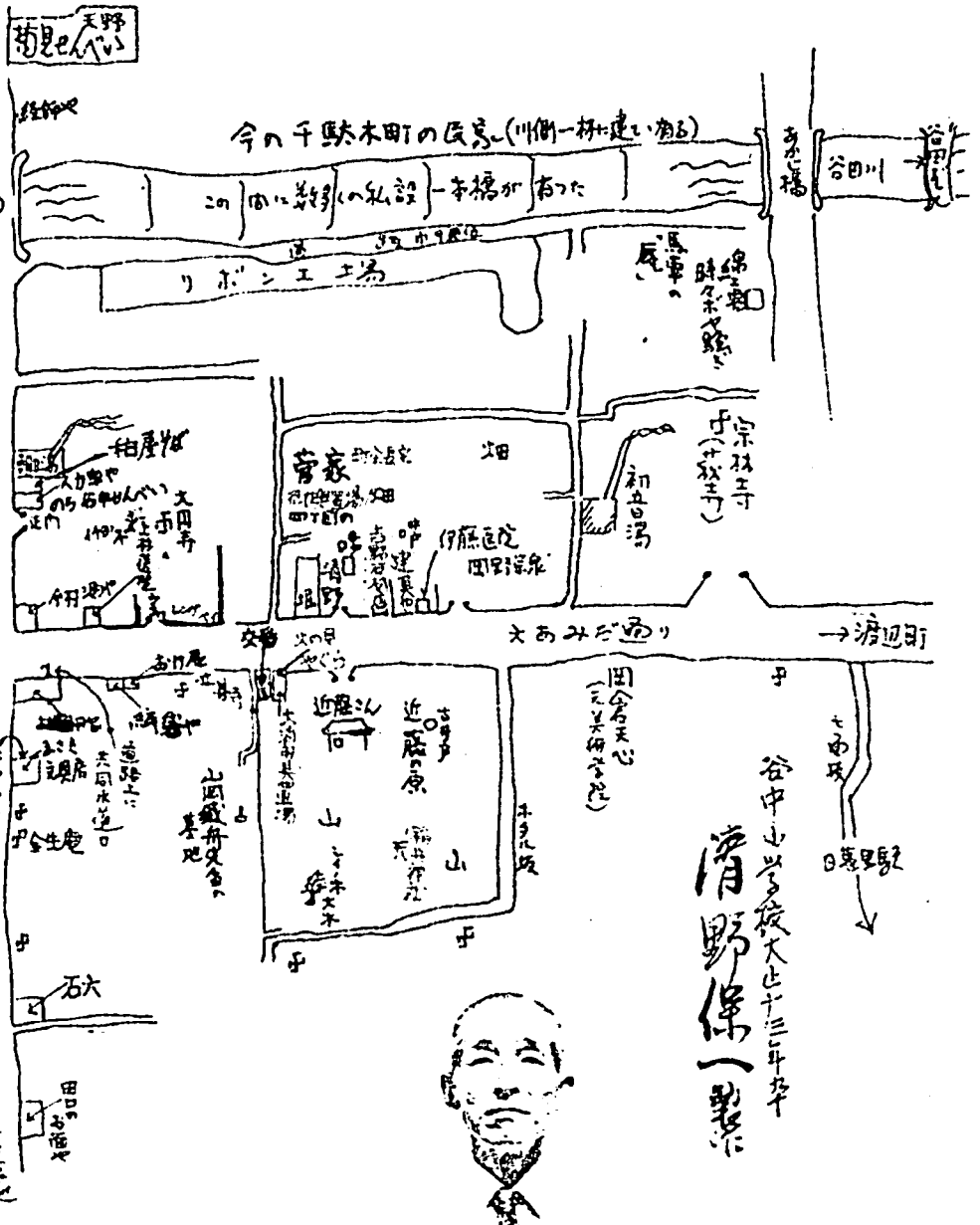
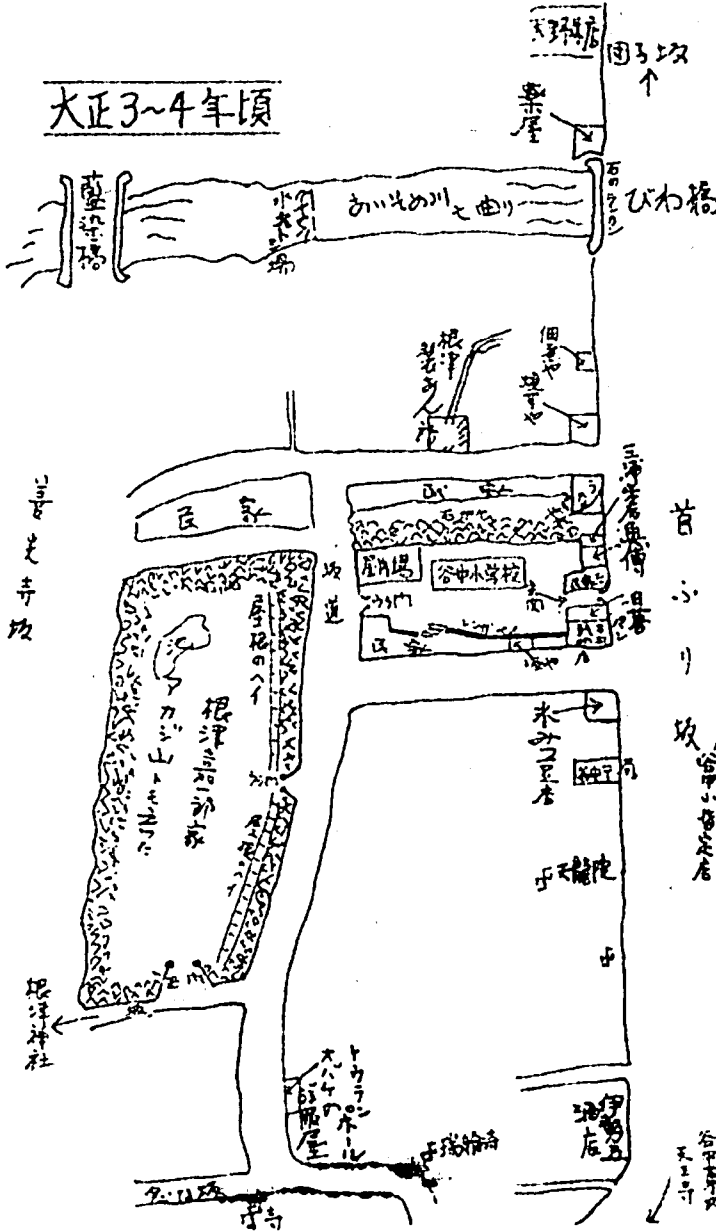
谷中に人家が集まっていた所は、三崎坂ぞいと善光寺坂ぞい、そして上野から牧野商会、功德林寺、朝倉彫塑館、経王寺、諏訪神社へと北北西に向かう高台の通りぞいぐらいで、まだまだ田や畑が広がっていた田舎であったといえる。今の夜みせ通りは当時は藍染川で、その東側は谷田田んぼといわれ、田が広がっていた。

その後、大正期にはいると、都市東京の人口流出と王子電車(のちの都電)、鉄道などの交通の発達によって、この谷中あたりから新開地と呼ばれる足立・葛飾へと都市が伸びていくのである。大正12年(1923年)の関東大震災では谷中の高台はほとんど被害がなかった。これは地盤がしっかりしているためである。

昭和16年(1941年)から始まった太平洋戦争でも谷中は東京の中では被害が少なかった方といえよう。

こうして谷中はいく度かの災害にも耐えて、古い家や町のたたずまい、それに職人さんが今でも比較的残っているのである。

大正3~4年頃



清野係(製糸)

谷中山谷中校大正十三年卒

[史跡めぐり]

1. 文七 ----- ミニ文楽人形の店
2. 伊勢一 ----- 張子の店、経営者は伊勢辰と同じ。
3. 三崎坂 ----- 別名 首ふり坂

三崎坂の地名のいわれは 駒込(北西)、田端(北北西)、谷中の三つの丘があい対しているから、あるいは、上野忍ヶ岡(南東)、湯島(南)、谷中の三つの丘の間にあるからともいわれている。また、昔、この辺に首をふる坊さんが往んでいたもので「首ふり坂」とも呼ばれている。

※「菊見せんべい」「田口人形店」と団子坂の菊まつり

せんべい屋が谷中に多いのはお寺の法事に出しやすい茶菓であるからであろう。その中の一つ「菊見せんべい」は団子坂が昔、菊人形でにぎわっていた頃の名残として店名に残っている。また、三崎坂の坂上の田口人形店は団子坂の菊人形の蹟を作っていた店である。それに大井寺では昭和59年より毎年、菊まつりが実施され、三崎坂の道の反対側の谷中小学校ではこの菊まつりに毎年協力している。

4. 伊勢辰 ----- 江戸千代紙の店

伊勢辰は江戸時代以来の伝統手法を守る手刷り和紙の店。元は神田にあったが昭和15年谷中に移ってきた。作家の田中康夫さんが「なんとなくクリスタル」の中で紹介して以来、広く知られるようになった。

一色一色を版木を取り変えながら手刷りで刷り込んでいく。物によっては30数種の版木を用いる。このようにしてできた千代紙で人形や箱などのさまざまな紙細工の作品も作っている。

二階には古くからのとび切りすてきな千代紙が陳列され、中には竹久夢ニが大正年間に考案したデザインのものもある。紙と彫刻と印刷の総合芸術といえよう。

※朝日湯から谷中小学校にかけて

このあたりに新幡随院法住寺という寺院が建っていて、旗本の娘お霊が幽霊となって新三郎に会いにくるという、円朝の落語「牡丹灯籠」の舞台ともなった所、芝居で牡丹灯籠を演じる時は、たたりがないようにと役者達がお参りに来た寺である。

5. へびみち-----くねくね曲った区境いの道で、川すじ跡
文京区教育委員会の説明板(昭和59年3月)によると次の通り、

文京と台東の区境の道路は、うねうね蛇行している。この道は現在暗渠となっている藍染川の流路である。『新編武蔵風土記稿』によれば、水源は染井の内長池(現在の都営染井霊園の北側の低地)で、ここから西ケ原村へ、さらに、駒込村から根津谷に入る。不忍池から上野の山の三枚橋下(公園入口のところ)で忍川となり、三味線堀から隅田川に注ぐ。川の名は、上流から境川、谷戸川(谷田川)、藍染川などと呼ばれた。藍染の名の由来はいろいろの説がある。染井から流れ出るから、川筋に染物屋があり川の色が藍色に染まっていたからなど、前方の道路の交わる所〔三崎坂とへびみちの交差点〕に、藍染川に架かる橋があった。---(略)--- 川は、水はけが悪くよく氾濫したので大正10年から暗渠工事が始められ、現在流路の多くは台東区との区境の道路となっている。

今でも、このあたりは、大雨が降ると浸水するという。

※藍染川と螢

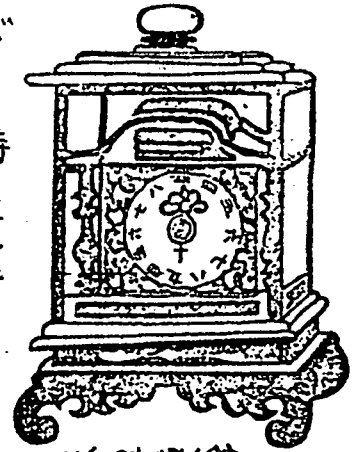
藍染川は一名螢川ともいわれ、上流の宗林寺裏手からこの川にかけての低湿地に夏になると螢が群をなし飛びかい、ホタルの名所として知られ、螢沢と呼ばれた。この螢沢に降りてくる道が螢坂で、今でも昼間でも薄気味悪い細い坂道として残っている。

6. あかぢ山-----大赤字で倒産したあかぢ銀行頭取邸宅跡
旧真島町は岡山真島藩主の三浦氏の広い下屋敷(上屋敷に対

して郊外におかれた大名の別邸)のあった所。そのうち俗にあかぢ山やまと呼ばれている地域がその三浦氏下屋敷の庭園跡である。大きな森や池、築山つぎやまがある。のち、明治の末期、あかぢ銀行の頭取(いわば社長)渡辺治右衛門が所有し、あかぢ山と呼ばれ、すぐわきの坂道も赤字坂と呼ばれるようになった。倒産後、根津嘉一郎の手に渡り、次に料亭緑風荘となり、昭和15年に今日のように分割されてしまった。

7. 大名時計博物館---大名時計(和時計)が展示されている。

江戸時代に各大名おほかえの時計師たちが長い年月をかけて製作した手作りの和時計(大名時計ともいう)が展示されている。檜時計・台時計などあって、美術的にもすぐれた名品揃い。いくつかは都の重要文化財に指定



大名時計博物館

本業が高級服仕立屋で、陶芸家でもあった故上口愚朗(作次郎)氏が、大正初め頃から生涯を費やして収集したもの。昭和49年に博物館として開館。現在は愚朗氏の子息等氏が館長をつとめている。

8. 領玄寺貝塚-----縄文時代のごみ捨て場所(貝塚)跡

領玄寺境内に貝塚がみられることから谷中の近くまで海がせまっていたことを物語る。この寺には縄文式土器が展示されている。

9. 三浦坂-----真島藩主三浦氏の大名家敷から名づけられる。

美作国(岡山県)真島の藩主三浦氏の下屋敷がこのあたりにあったためこの坂を三浦坂と名づけられた。

10. 天眼寺-----越谷市と縁の深い忍藩主松平侯の寺

①忍藩と松平下総守

奥平信昌は家康の長女亀姫を嫁に貰い、四男一女を得る。長男は奥平家を継ぐ。次男・三男・四男は家康の孫なので、家康の養

子となり、松平姓を名のり、徳川家の葵の紋をつけることを許される。そのうち四男^{しやうめい}忠明は松平下総守を名のり、松平下総守の初祖となる。松平下総守忠明は文武茶道にすぐれ、大阪冬の陣、夏の陣に大活躍し、秀頼・淀君なき後の大阪城の城主となる。のち姫路城主にもなる。なお、大阪城はのちに城主はおかれず、城主にかわって城代がおかれる。

名君のほまれ高き三代忠雅(忠明の孫)の時、桑名城主として活躍し、九代松平下総守忠堯までの113年間桑名城十萬石の城主だった。ところが、松平越中守定信がどうしても父祖の地がほしいので、文政6年(1823年)白河藩の定信の子の松平越中守が桑名藩へ、桑名の松平下総守忠堯が忍藩(現埼玉県行田市)へ、忍藩の阿部豊後守が奥州白河藩へ国替えとなった。その結果忍藩主は阿部豊後守にかわって松平下総守が代々と続く。すなわち、九代忠堯、十代忠彦、十一代忠国、十二代忠誠と続き明治維新となる。十代忠彦らは江戸谷中の天眼寺に葬られている。

②松平下総守と江戸谷中天眼寺

松平下総守代々の藩主の菩提寺は、忍の天祥寺(京都の妙心寺の塔頭「天祥院」の名からきている?)と、江戸におかれたこの谷中の天眼寺の二つといえよう。谷中天眼寺には藩主をはじめ忍藩関係の墓がみられ、忍藩の研究には欠かせない寺院の一つといえる。

天眼寺は初代松平忠明(寛永16年、1639年、江戸邸にて没す。天祥院と称し、高野山中性院に葬り、今も残っている)親交のあった洞院和尚(黄葉宗を開いた隠元とも交わりを結ぶ)の開山とされる。延宝6年(1678年)か、二代目忠弘の妻(細川越中守忠利の娘で藤姫という)が元禄11年(1698年)になくなると、江戸牛込にあった少林寺をいつの時か当地に移したとも推定され、妻の戒名(法号)からとって「天眼寺」と名づけられている。なお忠弘は妻がなくなった2年後の元禄13年、後を追うようになくなっている。

この寺院は高禄の忍藩士の者に限られるような格式の高い禅寺であった。藩士の墓地はもと善光寺坂の道をへだてた西の方に離れてあったが、大正年間に藩士の墓のあるこの墓地内に移されている。

③忍藩と越谷

今の越谷地域は初めすべて徳川家の直轄地で(寺社領を除く)、代官頭伊奈忠次、その子関東代官(のちに関東郡代となる)伊奈半十郎忠治の支配下にあった。その後、寛永2年(1625年)、現越谷地域内の三野宮村、大竹村、大道村、慈間村は幕末まで岩槻藩の領地に組み込まれる。砂原村、後谷村は元禄12年(1699年)より幕末まで六ツ浦藩の飛地となり、幕末まで続く。見田方村、南百村、四条村、別府村、千疋村、それに隣の現草加市内の麦塚村、柿ノ木村、伊原村(伊原は半高である)は寛文3年(1663年)に忍藩の飛び地となるが、のち元禄11年(1698年)に一部変更して柿ノ木領と呼ばれる東方村、見田方村、南百、四条村、別府村、千疋村、麦塚村、柿ノ木村の8ヶ村が忍藩の飛地となり幕末まで続く。藩領の他に旗本の領地(知行地)もみられる。

以上のように越谷地域は天領(幕府直轄地)の他に、忍藩・六ツ浦藩の飛び地や岩槻藩から続く領地や旗本の知行地が入り組んだ地域といえよう。

なお、この寺には江戸時代中ごろ、荻生徂来(儒学のうち古学派に属し、儒学の原典にあらわれたことばの意味を研究して、儒教の精神をあきらかにしようとした。将軍吉宗の政治の相談にあずかり、江戸茅場町に護国塾を開く)の門に入って、特に経済学分野に尽した学者太宰春台の墓がある。

11. 玉林寺 ----- 椎の木・勝海舟の虎の絵

三代将軍家光の時、この寺の裏山から不忍池の眺めがよいというので、家光から望湖山の山号を賜り、寺領1万数千坪と御朱印状を拝領した。寺の表門に掲げる「望湖山禅林」の額は家光の手になるものという。

また、裏山にある椎の木は樹齢600年と推定され、この寺院が建立される以前からあったもの。以前はフクロウの巣があったが今はカラスなどがとまっていて、木もすっかりおとろえてしまった。

玉林寺の大椎

(玉林寺 谷中一七十五)

善光寺坂を上り始めた左側に玉林寺の門があります。本堂は、門から五十メートルほど入ったつきあたりです。

本堂のうらは、小さな山や池などのある、美しい庭となっています。この庭には、東京都が指定した、天然記念物の大きな椎の木が立っています。

木のいきおいがだんだんとおとろえて、上の方がすっかりかれ、今は小さな木になってしまいました。

玉林寺は、豊臣秀吉が活やくしていた、天正十九年(一五九一)にたてられたとのことです。江戸時代になって、徳川幕府から、谷中村の土地をもらっています。お寺には、今でも、この時の朱印状が残されています。この土地は、徳川幕府がおかれて、明治の新しい世の中になった時に、国に返しました。

本堂には、勝海舟がえがいた虎の絵がかかっています。勝海舟(一八二三—一八九九)は、明治維新の時、江戸城をおたやかにあけわたすために力をつくした人です。明治の新しい政府になつてからも活やくしました。



12. 善光寺坂 ----坂の上の方に善光寺があった名残
台東区教育委員会の説明板(昭和54年3月)は次の通り

谷中から文京区根津の谷に下りる坂には、この坂と北の三浦坂、あかぢ坂とがあるが、あかぢ坂は明治以後の新設である。善光寺坂は信濃坂ともいい、その名はこの坂上の北側にあった善光寺に基づく。善光寺は慶長6年(1601)信濃善光寺の宿院として建立され、門前町も出来たが、寺は元禄16年(1703)の大火〔水戸様火事〕に類焼して、青山(港区青山三丁目)に移転し、善光寺門前町の称のみが明治5年まで坂の南側に存した。---(略)---

なお、善光寺坂は今は言問通り^{こととい}の一部、坂下には根津の遊郭^{ゆうかく}があった。

13. 筆師 田辺文魁堂 -- フロアが使う手作りの和筆の店

一本の筆を作りあげるのに、筆につかう毛を取りよせたり、その毛の油をぬく作業など大変手間ひまがかかる。ここの手作りの筆をピカソも買ったし、ミロは来店して何本も買い込んでいったという。店内に「世界の巨匠ミロ先生揮毫 筆師田辺松蔵作筆で」という文とミロの写真などが紹介されている。



生まれて半年くらいの赤ちゃんの頭の毛を全部刈りとってその毛をこの店に持って行くと、その毛を油抜きをして筆を作ってくれるそうだ。ただし、一度でもハサミのはいった髪のもでは毛先がないのでだめだそうです。

14. 一乗寺

日光寺坂を上った信号の角に、一乗寺があります。このお寺も玉林寺と同じところにたてられました。少し前まで、けいだいには大きな松がしげっていて、「谷中のお化け松」などとよばれていました。このお寺には、江戸時代の学者、太田錦城（一七六五〜一八二五）の墓があります。錦城は、加賀の国（石川県）に生まれました。京都や江戸などの有名な学者について学びましたが満足できずに、ひとりで勉強し、世の中にとめられました。

15. 自性院

愛染明王（三つ目・六本の手を持ち、常に怒りの相を表わす愛染の神、近世では恋愛の神となる）は天文年間（1532〜1554）境内の楠を切って彫ったもので、もと愛染堂にあった。

太田錦城墓 （一乗寺 谷中一六〇一）

愛染かつら （自性院 谷中六一二一八）
昭和の初めころ、小説「愛染かつら」は、日本中の話題をさらいました。映画になると、どこの映画館にも、長い行列が出来ました。この小説の作者、川口松太郎は、自性院におまいりした時、本堂にまつられている愛染明王と、庭にあったかつらの木を見て、小説の題を決めたと言われています。
自性院は、江戸時代の初めころ、神田にたてられたお寺です。

大久保主水墓

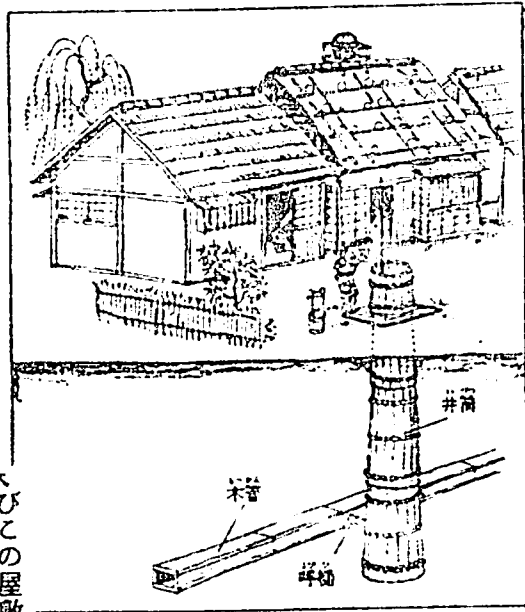
(瑞輪寺 谷中四一―二五)

谷中小学校の屋上から東の方を見ると、木々の緑に守られるようにして、いくつものお寺が目に入ってきます。その中でも、ひととき大きなお寺が、瑞輪寺です。

このお寺は、最初、日本橋にたてられました。神田から谷中へと移って来ました。ここには、神田上水を作った、大久保主水の墓と井戸があります。

徳川家康は、江戸に入った時、江戸の町に水が不足することを見こんで、大久保主水に水道を作るよう命じました。

主水は、井の頭池を水のもととして、小石川から神田まで水道を引きました。これが神田上水です。この大工事を、たった三か月でやりとげました。家康は、ほうびとして、「主水」という名前をあたえたのです。(もんどーと、にござらない)



神田上水



に分けられたり、移されたりしました。

昭和五十五年になって、瑞

輪寺のけいだいに、りっぱに

たて直されました。桂離宮よ

りもよいとほめる人さえいる

ほど、みごとな建築物です。

東京蒲田(大田区)の梅屋敷といえば、江戸時代の終わりがから明治にかけて、梅の名所として人々に知られていました。江戸時代、将軍も、たびたび

梅屋敷の御座所

(瑞輪寺 谷中四一―二五)

瑞輪寺には、明治の憲法のもとを作った一人、井上毅(一八四四―一八九五)の墓もあります。井上毅は熊本県に生まれました。明治憲法のほか、教育勅語も作りしました。伊藤博文のもとで、文

部大臣もつとめています。

17. 西光寺 ----- 韋駄天寺ともいひ、韋駄天の石仏で有名。

韋駄天の石仏

(西光寺 谷中六十一丁)
七面山の向かい側に、西光寺があります。むかしは広い原っぱがあり、子どもたちはたこあげなどをしました。

このお寺には、大きな石の仏様が、いくつも立っています。その中で、とくにりっぱなのが、韋駄天です。ですから、西光寺は、韋駄天寺ともよばれています。



韋 駄 天



西光寺住職の説明板(韋駄天)によると次の通り

四天王南方の増長天の持のてで、湿婆神〔インドのヒンズー教の代表的な神の一つ、破壊や生殖をつかさどる〕の子と伝えられ、走力に優れ、速かに邪神を消除するので仏法(特に伽藍〔寺院・僧房の総称〕)の守護神とされる。鬼神の首領として釈尊涅槃〔釈迦の入滅〕の際に捷疾鬼が仏牙(釈迦の歯)を盗んだのを取戻した馬駿足で知られる。以来、足・腰痛平癒に効験ありと古来より信仰されている。当山の韋駄天像と十一面観音像は共に藤堂高虎侯が朝鮮より持ち帰ったとの説がある。 谷中西光寺当山廿六世

藤堂高虎は安土桃山時代の武将。近江の人。初め浅井長政に仕えた。秀吉の弟、羽柴秀長及びその子にも仕え、後に高野山に登ろうとしたのを秀吉に召しかえされて伊予国(愛媛県)宇和島藩主となり、文禄の役に従い水軍の将として活躍。秀吉没後は徳川氏に属し、関ヶ原の戦い、大阪の役の功により、伊勢・伊賀32万石となる。子に与えた庭書は高虎の遺訓としてよく知られる。(1556-1630)

18. 七面山祖師堂

初音幼稚園前の信号を、言問通りの方へおれた右側に、小さなお堂のある、七面山祖師堂があります。

この小さなお堂には、むかし、日蓮上人が谷中を通った時、関氏にあたえたという、お経を齎したしゃもじがまつられています。日蓮上人が関氏の家にとまった夜、お産で苦しむ関氏の妻のおなかに、このしゃもじをのせたところ、たちまち安産しました。そこで、関氏はお堂をたてて、まつったのです。もとは天王寺にありましたが、天王寺の改宗によって、今の場所に移されました。

関氏とは感心寺（のちの天王寺）の開基の関長権のこと。この祖師堂は俗に「しゃもじ寺」とも呼ばれている。

19. 面六（田口人形店）

〔面六〕

菊人形、まとい

田口義雄さん

神社などのお祭り

の時、おかぐらが奉

納されますが、面六

さんは、代々、おか

ぐらの面を作ってき

ました。また、菊人形も作っています。菊の季節が終わると、火

漕が使う、まといを作ります。（谷中 五一―二四）



七面山祖師堂

（瑞輪寺 谷中四―二一五）

20. 伊勢五 --- 古い造りの酒店. 創業は宝永年間(1704/1710)

21. いろは茶屋跡 --- 天王寺の富突とともに栄えた茶屋町

江戸時代中頃にできた「いろは茶屋」は初めは純然とした水茶屋（色茶屋・料理茶屋に対して道ばたでお茶などを出して旅人を休ませた店）で、天王寺（感心寺）に参拝する人たちの休み場であったが、天王寺の富突が盛んになり人出が多くなると次第に色茶屋（遊女をかかえておく茶屋）に変質していく。しかも客も、富突でもうけた天王寺の坊さんたちや上野山にある数多くの寺院の坊さんが主となっていった。

いろは茶屋と呼ばれたゆえんは「いろは」を染めぬいた暖簾を掛けていたからとも、店が四十七軒あったからだとも、また「四十八文」ぽっきり（当時、上野が二百文）で遊べたからだともいう。

武士はいや 町人すかぬ いろは茶屋

上の川柳は当時のことを物語ったものである。

22. 谷中墓地 ----- 谷中霊園・天王寺墓所・寛永寺墓所からなる。

谷中の墓地 (谷中七丁目)

わたしたちが、谷中の墓地とよんでいるのは、東京都が管理している谷中霊園と、天王寺の墓所、それに、寛永寺の墓所の、三つが集まっている所です。

谷中霊園は、青山、染井、雑司ヶ谷、多摩などの霊園と同じように、法律によって、明治七年(一八七四)に開かれました。広さは、約十萬二千平方メートルにおよびます。ほとんどが、天王寺の持っていた土地でした。

むかしは、桜のさく墓地に、五重塔が高くそびえていて、遠くからも、墓地のある場所が分かりました。

この墓地を使用している人は、約六千人といわれます。今は、墓地の売り買いをしてはいけないきまりとなっていて、現在、地下にねむっている人々の家の人のほかは、ここにほうむられることはないでしょう。

谷中の墓地には、徳川将軍や、総理大臣などの、世の中を動かした人、学者や芸術家、さまざまな人々がながいねむりについでているのです。



谷中墓地には 天王寺西方に東大医学部で解剖された死体の霊を慰める巨大な解剖体諸精霊塔や千人塚もみられる



国電・日暮里駅を出て、目の前の急な石段を上ると、そこは谷中墓地。樹木と墓石が並ぶ静かなたたずまいだ。

矢田部良治の学者、著名人の墓石に取り囲まれるように、下谷天王寺駐在所があつた。谷中做策の巡路にあたるため、駐在所には問い合

わがが多い。

桜武秋巡査部長(こが)が防犯

さうして霊園

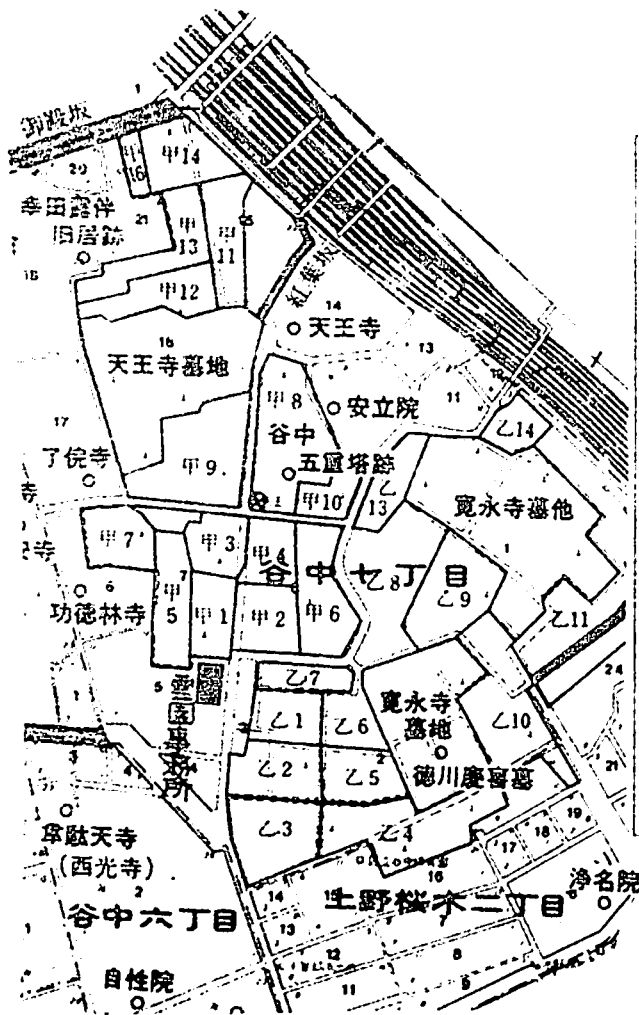
内の墓石案

と周辺地図を

刷り込んだところ、これが好評で、一冊三十枚はな

ミニコミ新聞の発行や墓地案内地図の発行するなど谷中の名物お巡さんの記事 (S61.2.7付 東京新聞)

谷中靈園・著名人墓碑



南原 羽峯 (1822-1909)	国学者	甲1号7側
中村 伸政 (1809-1886)	歌舞伎役者	甲1号11側
福地 桜庵 (1841-1906)	劇作家	甲1号12側
高橋 右伝 (1851-1879)	古着屋吉藏殺し	甲2号1側
川上富二郎 (1864-1911)	新派俳優	甲2号3側
沢田正二郎 (1892-1929)	俳優、通称「沢正」	甲3号1側
江崎 礼二 (1855-1910)	写真家	甲3号1側
長田 秋涛 (1871-1915)	「俗権」訳者	甲3号6側
花柳 万輪 (1821-1903)	花柳流創始者	甲3号7側
小野 信 (1852-1886)	政治家	甲6号10側
赤井 景福 (1859-1885)	自由民権運動思想家	甲8号6側
佐々木信綱 (1872-1963)	歌人、国文学者	甲8号7側
川上 冬岸 (1827-1881)	洋画家	甲8号10側
小中村清矩 (1821-1894)	明治前期の国学者	甲9号8側
三乃世頼 (1825-1886)	大審院長	甲9号17側
間島 冬道 (1825-1890)	歌人	甲9号21側
獅子 文六 (1893-1969)	小説家	甲9号22側
長谷川一夫 (1908-1984)	俳優	甲9号2側

塚田 秀鏡 (1848-1919)	彫金家	甲9号26側
井上 蘭台 (1705-1761)	儒学者	甲10号2側
石川千代松 (1861-1935)	動物学者	甲10号3側
水野 年方 (1866-1908)	明治の浮世絵師	甲10号6側
欠田部良吉 (1852-1899)	植物学者	甲11号8側
出羽の海 (1874-1922)	19代横綱	甲13号2側
ニコライ (1836-1912)	キリシタ正教会大主教	乙2号1側
依田 学海 (1833-1909)	漢学者	乙3号6側
中村 歌子 (1841-1903)	明治の歌人	乙3号9側
外山 正一 (1848-1922)	教育者	乙3号10側
石原 純 (1881-1947)	理論物理学者	乙4号4側
宮城 道雄 (1894-1956)	箏曲家	乙4号7側
菊池 大腕 (1855-1917)	数学者	乙5号1側
箕作 秋坪 (1825-1886)	蘭学者	乙5号1側
大原 重徳 (1801-1879)	政治家	乙6号5側
重野 安釋 (1827-1910)	歴史学者	乙6号5側
糸野 採菊 (1832-1902)	明治の劇作家	乙7号2側
常ノ花 (1896-1960)	31代横綱	乙13号右4側

村田 経芳 (1842-1925)	村田銃の発明者	乙7号甲側
田口 卯吉 (1855-1905)	経済学者	乙7号6側
横山 大観 (1868-1958)	日本画家	乙8号4側
鳩山 一郎 (1883-1959)	政治家	乙8号4側
伊藤 圭介 (1803-1901)	本草学者	乙8号6側
広津 和郎 (1891-1968)	小説家	乙8号10側
鷲津 毅堂 (1825-1882)	儒者、永井荷葉の祖父	乙8号10側
浅田 宗伯 (1813-1894)	医師	乙8号10側
本居 豊顕 (1834-1913)	国学者	乙10号4側
馬場 孤蝶 (1869-1940)	英文学者	乙10号5側
馬場 辰猪 (1850-1889)	政治家、孤蝶の兄	乙10号5側
渡沢 栄一 (1840-1931)	社会事業家	乙11号1側
穂積 重道 (1883-1951)	法学者	乙11号2側
上田 万年 (1867-1937)	国文学者	乙11号5側
平野 富二 (1846-1892)	錢造活字をつくる	乙11号14側
岸田 吟昏 (1833-1905)	新聞事業先駆者	乙12号7側
中村 正直 (1832-1891)	啓蒙学者	丁院寺墓地

23. 高橋お伝の墓 ---- 吉着屋吉蔵殺しの犯人、毒婦として知られる

高橋お伝は明治12年(1879年)1月31日、殺人罪で処刑。日本で最後の斬首で、八代目首斬り浅右衛門が首をはねた。一回、二回と失敗し、三太力目で首が落ちた。首は年29歳である。

お伝は群馬県利根郡下坂村に生まれ、村一番の美人と評判された。14歳で結婚したが、まもなく別居。淡川で浪之助と再婚したところが、この浪之助が癩病にかかると二人は御世を捨てて東京へ出た。だが、お伝は病気の夫が世帯主になって専業主婦の妻になった。半年後一帯くすぶりのヤクザと一緒になり、二人で組んで恐喝で稼ぐ生をした。明治9年(1876年)3月27日、お伝は商人後藤吉蔵と東京浅草の旅館に入り、やがてくすぶり寝たところをカミソリでのどを切って殺し、金を奪って逃げた。

今からみれば、もっと凶悪な犯罪はいくらでもあったが、当時は女性の犯罪が非常に少なかった上に、彼女が大変な美人だったので、マスコミが一斉に書きたてた。仮名垣魯文(墓は三崎坂に面した永久寺にあり)は、「高橋お伝夜叉譚」で彼女の生涯を書き、ベストセラーになった。ところが、これがどこまで事実かわからないしるもの、小説としておもしろくするために作った部分がかなりある。この小説を下敷きにして、お伝の伝記が次々に書かれ、彼女の毒婦(男をだまし、人を傷つける悪い女)ぶりはどんどんエスカレートしていき、世の中によく知られていった。

24. 長谷川一夫の墓 ---- 美男の代名詞にもなった時代劇の大スター

長谷川夫人が昭和59年2月17日、肺がんでなくなる。一夫氏にとってはあまりにもショックだった。そのあとを追うように4月6日深夜逝った。最愛の妻の葬儀・告別式に病身にむち打って陣頭指揮で取り仕切り、主治医の注意を押し切って谷中の墓地に長い間寒風にさらされて立っていたこととか、かせをこじらせて命取りとなった。長谷川一夫夫妻の墓は小さいが、とてもわかりやすい所にあって、オールドファンの訪問が絶えない。次は4月7日付

朝日新聞の朝刊にのった記事である。

美男の代名詞といわれた往年の時代劇スター、長谷川一夫さんが六日深夜、逝った。独特の色気をたたえた流し目に、鼻にかかった語り口。林長二郎時代、暴漢に左ほおを12センチも切られながら「鏡を、鏡を」と叫んだ役者根性。晩年は「痛々しい」とさえいわれながらも、永遠の二枚目を演じ続け、昭和の初めから約60年間にわたって女性ファンを魅了した。長い闘病生活の末、最愛の繁夫人を追うように、その華麗なる一生を終えた。76歳。昭和の看板スターがまた一人消えた。



NHK大河ドラマ
「赤穂浪士」より

活躍の場が大衆芸能だったために「人間国宝」などとは無縁だったが、「雪之丞変化」の闇太郎、「一本刀土俵入り」の駒形茂兵衛、「藤十郎の恋」の坂田藤十郎、月形半平太、銭形平次、そして清水次郎長、大石内蔵助……長谷川さんが映画、テレビ、舞台で演じ続けたヒーローたちは、永遠に日本人の思い出からは消えないに違いない。「永遠の二枚目」長谷川さんは昭和の時代を大衆と共に歩み続けた最大の大スターだった。

思い出のあのシーン、あの舞台の裏に、厳しい芸道の修業と役者としての工夫があった。トレードマークでもあったあの流し目。長谷川さんが、映画にデビューした昭和2年の時から計算された演技だった。当時、映画館は男子、婦人、それに同伴席が区別されていた。左席にあった婦人席を意識してカメラの前に立った結果が流し目だった。舞台から客席へ目をやると女性客があわててコンパクトを取り出す、という伝説まで生まれた。デビュー当時から、カメラの位置やライトについてもうるさいほど熱心だった。時代劇の股旅もので、今ではテレビでも普通になっているやくざの舞台羽の寸法は、長谷川さんが工夫した長さである。本来の寸

法だとひざ下まで合羽が届く。長谷川さんはそれをももの中程まで持ち上げた。それでさっそうとした印象が強調できるし、肩にかけた場合もいきである。西部劇映画の革ジャンパーからヒントを得たのだそうだ。---(後略)---

語人声

三十四年前の本

紙「人物大鑑」に「ハセガワカズオは、もはや國有を備じやない。自

ある。長谷川一夫はその後もずっと、二枚目の敵敵であり続けた。同じころ、箱川肇は書いてる。「日本一の男」である彼は、遊んで(？)映画批評家から冷遇される点でも、日本一である。批評家から冷遇される点でも、長谷川一夫は五十年、いや、六十年も現役の二枚目で通した。映画「雷之丞変化」や「藤十郎の恋」でみせたあの甘さ、美しさは天賦のものだろうが、それだけで六十年も二枚目でいられるはずはない。熟年になってからは、毎日三十分、両手の風水浴を欠かさなかったという。指の痒さを保つためである。どうやって三十年代のうちに髪がたせるかという工夫も持った。鼻に覆われて顔に汗を流した。鼻は有名だが、その時の服の中、坂崎出羽守が下げがをした時の

自分の顔面を思う。「そうだ。自分が演じた時には何の顔みというのを全然考慮していなかった。大段な明後日だった。▼敗戦直後、日劇で入江たか子とレビニー「花のルンパー」に出演した。側近は強く反対したが「時代の要求に耳を傾ける」といってルンパを踊った。「二枚目」というのは、いやな面をさらけださないとお客が辟んでくれないものですよ」ともいっている。相當にキザに思えることでも、これに演ずる。大衆りのみえをちりばめる。それを人は通俗というが、そういう意味では、この人は大通俗に徹した人であり、通俗の探求者でもあった。一歩引ればこびになり、いやみになるところを盛々と切った▼陰年でも、公演のたびに自分で一万枚の切符を売った。それだけの切符が売れたことは二枚目の助成でもあった。国はついに人間國運には満足しなかったが、ハセガワカズオという稀有(けう)の二枚目の名はいづか「狂野の人間國運」の同義語になった。

S59.4.8 14 朝日より

25. 谷中五重塔跡-----露伴の「五重塔」のモデル。後に焼失
 谷中は狭い坂道にお寺やしもた屋(商売をしないで暮らしている格子作りの家)がひっそりと並び、職人さんもみられ、「江戸のある町」と言われている。ここに桜の名所である谷中墓地がある。その墓地のほぼまん中へんに、竹のさくにかこわれた土台の石がある。ここに天王寺の五重塔がそびえていたのである。
 明治の文豪幸田露伴は五重塔近くの銀杏横丁の奥に住み、名作「五重塔」を書いた。露伴が新聞連載の原稿を郵便箱に入れに行く道すがら五重塔を仰ぎつつ銀杏横丁を歩いている時に、ひらめき、小説化することを思いついたのであろう。こうして谷中に住んだ幸田露伴はその美しさに引かれて谷中の塔をモデルに、塔の建設を舞台とした小説「五重塔」が生まれた。すなわち、口下手で愚直だが名人はだの江戸っ子大工の「そり十兵衛」

は、自分の才能のすべてをかけ、精魂こめて塔を作るのだが、落成式を前日にひかえて江戸は大暴風にさらされる。十兵衛は自ら塔にのぼって命をかけて塔を守り通し、無事落成式を迎える。江戸職人氣質を描き出している。明治24年(1891年)、25歳の時の作品である。

谷中の五重塔は寛永21年(1644年)に建てられるが、明和9年(1772年)の目黒行人坂火事にあつて焼失。19年後の寛政3年(1791年)、棟梁 八田清兵衛が47人の大工を用いて1ヶ年半の月日を費やして再建される。総構造り、高さ34mである。江戸四塔(芝の増上寺、浅草の浅草寺、上野の寛永寺)の一つ。朝倉文夫氏は「建築美学的に谷中の塔がずば抜けて良くできており、シルエットの美しさ、格調など、他の塔は足元にも及ばない」と称賛している。また、朝倉文夫邸の左隣りの洋館(現存)に大正15年4月から1年間住んだ北原白秋は次の詩を作っている。

天王寺の朝涼

林の木に白き花群れ、 塔はあり、ひむがしの方、	紅くすむ扇骨木いけがき、 刈りそめてなんぞすがしき。
日落ちて 吹きはらふもの、 まさしくも風は夏なり、	露はあり、石に當して、 しかもこは幽世ならず。
夜だつや、空の朝涼、 物物線、小鳥飛ぶ、環ぶ。	愚かなり、死にし、幽けき、 けに、現 生くるに如かず。
	林の木に白き花群れ、 鐘が鳴る、鐘が鳴るなり。

谷中の五重塔は火の災、明治大震災にも驚れず焼けず、また、太平洋戦争の空襲からものがれた。それが、昭和32年7月6日の夜がまだまだ明けぬ頃(午前3時30分頃か)、塔の2階付近から出火。はしご車が来て、消防士が猿の如く駆け登ったが、谷中は高台のため水圧が低くチョロチョロしか水が出ない。その間に芯棒に吹

き抜けみだいに火が云わって炎は塔全体を包み、自身が巨大なたいまつとなって全焼した。鎮火は朝5時、寝巻姿の見物1万人、露伴の令嬢で作家の幸田文さんも文京区表町の自宅から浴衣姿でかけつけ「父露伴の書いた塔が燃える---」（毎日新聞S32・7・6夕刊）とぼう然と立ちつくしたという。また、谷中在住51年の朝倉文夫氏は「関東と関西の型を折衷した塔で、屋根の線が独特の美しさを持っていた。震災であの塔が揺れるのを見たが、焼けるのまで見ようとは---」（アサヒグラフ 7・21）と嘆息した。

焼け跡から男女一組の焼死体が発見される。残った金属性の指ぬきなどから男性は洋裁店主（48歳）、女性は同店員（22歳）であると判明。一升びんに石油を入れて持ち込み、睡眠薬を飲み、火をつけたのである。心中・放火である。貴重な文化財がこの重大さのわからぬ二人のために道ずれとなったのである。

26. 天王寺 ----- 旧称は感応寺といい、富突で有名

①天王寺略歴

日蓮上人はこの地の住人、関長耀の家に泊った折、自分の像を刻んだ。長耀は草庵を結び、その像を奉安——伝承による、天王寺草創の起源である。一般には、室町時代、応永（1394～1427）頃の創建という。『東京府志料』は「天王寺 護国山ト号ス 天台宗比叡山延暦寺末 此寺ハ本日蓮京ニテ長耀山感応寺ト号シ 応永ノ頃ノ草創ニテ開山ヲ日源トイヘリキ」と記している。東京に現存する寺院で、江戸時代以前、創始の寺院は多く



谷中・天王寺

ない。天王寺は都内有数の古刹である。

元禄12年(1699)幕府の命令で、^{かんおん}感応寺は天台宗に改宗した。ついで天保4年(1833)天王寺と改めた。境内の五重塔は、幸田露伴の小説『五重塔』で知られていた。しかし昭和32年7月6日、惜しくも焼失。江戸時代、ここで“^{とみ}富くじ”興行が開催された。^{めいご}目黒の^{めいご}滝泉寺〔目黒不動〕、^{ゆしまてんじん}湯島天神の富とともに、江戸三^{とみ}富と呼ばれ、有名だった。富くじは現在の宝くじと考之ればいい。

《以上 S59.3 台東区教育委員会の説明板》

②天王寺大仏(釈迦牟尼如来像)

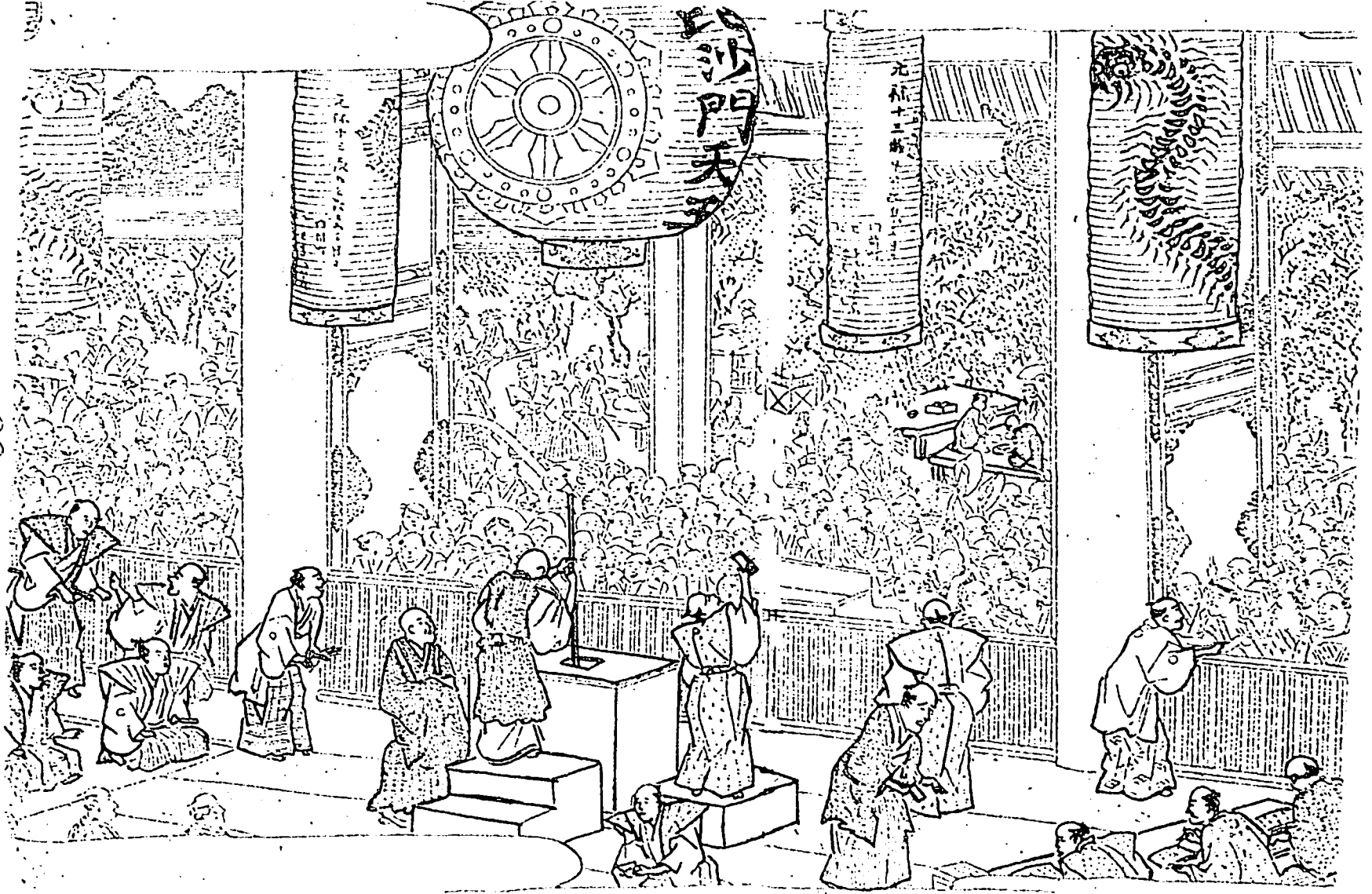
齊藤月琴作『武江年表』は元禄3年(1690)の頃に、「五月、谷中^{じょうちゆう}感応寺丈六^{ぶんにち}仏建立、願主未詳。」と記している。感応寺は天王寺の古刹。天保4年(1833)、感応寺は天王寺と改名した。文中の丈六仏はこの如来像である。お釈迦様の身長が1丈6尺あったといわれているのにちなみ、丈六に造る仏像多く、丈六仏の名が起った。しかし原則として、^{けっかふざ}結跏趺坐(座禅の座わり方)像に造るので、座高は八尺ないし九尺が標準である。〔1尺は30.3cm〕

像背面下側台石の銘文によると、この像は「元禄三年仲夏寺主日遼代ニ鑄造」し、旧本堂(五重塔跡北方西側の道路中央付近)右側の地に建て、明治7年(1874)境内公収による谷中墓地開設で墓地西隅に遺存し、昭和8年(1933)6月「聖像ヲ此地ニ奉遷シ修理ヲ加ヘ台座ヲ築造」した。『江戸名所図会』は本堂向って左手にこの像を描き、明治41年刊の『新撰東京名所図会』は「唐銅丈六釈迦」と記している。《以上、S56.3 台東区教育委員会の説明板より》

③天王寺の富突

富突とは、多くの民衆を前に、大きな箱の中に入っている^{とみ}富札を長柄のついた^{きり}錐で突いて当たりを決めたもので、今日でいう宝くじのようなもの。

富札は長さ5寸(16.5cm)、幅は1寸3分(4.3cm)ぐらいの木札で、札番・くじ日が記され、札屋や^{とみ}催主の判が押されていた。



札番は、松竹梅とか春夏秋冬とかイロハとかの組とそれに番号からなっている。札屋がこれを売った。

図は谷中感応寺の富突の場面である。湯島天神、目黒不動とともに江戸三富に含まれているが、その中でも一番人気である。富興行のある日は、あちこちから群衆が押しよせ、ケタの鼻緒は切れる、そではちぎれる、すりも横行するというさわぎとなる。図中央にある大きな箱は、今まさに当たりを決めようとしている、富札を入れた箱である。この箱の中を錐で突いている、うしろ向きの男は、おそらく感応寺の僧であろう。その横で大きな台に乗って、当たり札の札番を読み上げているのは、富興行を管轄する寺社奉行所所属の役人である。右下に座っている役人は、読み上げた当たり番号を書きうつしている。この富興行に多数押しかけ大変な人だかりである。くじ1枚に夢を託した民衆の声が聞こえてくるようだ。富札の入った箱は、富札を突く直前にふってまぜられる。般若経を誦経しながらおこなわれる。「御富、突きましようーッ」のかけ声で、木の富札をつめた箱の穴から僧が長い柄のついた錐をさし込み、1枚の富札を突きさし、引き出して、横の役人に渡す。役人は大声で「松のオー百ーウ二十一ウ三ばあん」というように当たり番号を読み上げる。つめかけた群衆はその声に一喜一憂する。一番富の次は二番富、三番富……と続いていく。百番富が突き止めである。百番富は今でいう特賞にあたり、嵐のようなものすごい興奮が会場一杯にわき上がったものであろう。

富札1枚の値段は多少の相場があるが1分である。1分とは1両の $\frac{1}{4}$ で、銀15匁くらい。当時の大工1日の工賃が5匁なので富札1枚が約3日分のかせぎである。当たり金の方は、1000両くじ(現在の数千万円)は大興行の時、300~400両が普通。当たった場合、賞加金として2割を寺に奉納した。突いた順番により当たり金が決まっていた。1000両を例にとると、1番富100両、50番200両、100番富突き止め1000両、50番目ごとに10

両、10番目ごとに20両、これ以外の2番目〜99番目を「^{ぎん}草札」といい各3両、また、それ以外に1番違い、組違いにも賞金が出された。最初の頃は年3回だったが、盛んになってくる宝暦の頃からは毎月18日に行なわれるほどとなった。しかし、1枚だけでなく、大量の札を買う者も多くなり、財産を失なう者も多数出現してきたので、このような富突の過熱に対し、水野忠邦の天保の改革の時、禁止されてしまう。

27. 御殿坂^{ごてんざか} ----- 坂下に寛永寺の宮さまの御殿^{ねぐし}があったため、日暮里駅ができる前はこの御殿坂は根岸の方へ下る急な長い坂だった。この坂を下った先の根岸に、上野寛永寺の門主^{もんしゅ} 輪王寺^{りんおうじ}宮の隠居所の御殿があったためこう名づけられた。寛永寺の門主は代々皇族を迎える習わしである。

なお、別名、^{こじき}乞食坂ともいうが、寺が多いため、お参りの客の^{よそ}余祿にあづかる乞食が多かったためであろう。

28. 片山哲^{てつ} 旧居跡 --- ステンドクラスがはまっている元首相の家
社会党委員長片山哲は昭和22年(1947)6月、初の社会党内閣を誕生させたが、翌年2月党内不一致のため退陣する。

29. 幸田露伴旧居跡

明治24年(1891)から谷中にすみ、左隣りは朝倉文夫邸である。

30. 北原白秋旧居跡

大正15年(1926)から昭和2年(1927)の1年間、朝倉文夫邸の左隣りにすみ、「からたちの花」はここで作詩したもの。今でも白秋が住んだ洋館が残っている。

31. どうこ屋

どうこ屋を含め、谷中の主な職人さんたちを紹介する、p29の下とp30の上を参照のこと。

32. 朝倉彫塑館

朝倉彫塑館

(谷中七十八ー十)

谷中五丁目と六丁目のさかいを南北に走る道の、日暮里駅より、黒くぬられた円いたてものがあります。これが朝倉彫塑館です。ここは、彫刻家の朝倉文夫が長くすみ、たくさんの彫刻の名作を残した所です。

朝倉文夫(一八八三ー一九六四)は、大分県に生まれ、東京美術学校を卒業しました。西洋の新しい彫刻をねっしんに勉強し、大学を出た二年後には、大きなてんらん会(文展)で二等賞をとりました。

後に、東京美術学校の教授となりました。また、今の場所に朝倉塾を開いて、若い彫刻家を育てるのに力を注いだのです。

早稲田大学に立っている、大きな「大隈侯の像」は、朝倉文夫の作品です。そのほか、「墓守」や「時の流れ」など、有名な作品をあげると、きりがありません。

朝倉文夫は、彫刻では日本の第一人者でしたが、彫刻だけではなく、絵(南画)もじょうずでしたし、お茶の道具なども作りました。また、植物を、たくさん育てています。✓

昭和二十三年には、文化勲賞を受けました。昭和三十九年に、八十一才でなくなりました。

朝倉彫塑館には、大きな石や池などのある庭があります。また、たてものの中の内りっばさには、ただ目を見はるばかりです。とくに三階の「朝陽の間」に使ってある木は、ふしのない北山杉で、しょうじの板には純金が入っています。



〔指信〕

桐指物師

森田広蔵さん

〔大角〕

大工棟梁

石山国次郎さん

桐の木を使って、小さな箱などを作っています。彫刻などの美術品、お茶の道具や花器などをに入れておくケースが主です。最近、六角の盆燈籠を作りました。

谷中 6-2-2

これを、何年もかけて解体し、また、もともと同じに、建てなおしました。この建物は、くぎを一本も使わずに組み立てられています。

谷中 6-2-22

〔銅菊〕

どつこ屋

大沢 清さん

銅の板を金づちでたたきながら、やかんや、フライパン、なべなどを作っています。機械で作ると、底と立ち上がりとの角の部分がかうすくなるため、長持ちしません。それが、手作りだと、あつくできますから、じょうぶな食器ができるわけです。作る人の、心がこもります。

(谷中 五一九ー二十一)

〔山田寄木店〕

寄木細工

山田太郎さん

いろいろな種類の木を小さく切って組み合わせる仕事をしています。自然のままの木の色を使つて、美しいもようを作り出します。出来あがつた板は、玄関や洋間のゆかなどに張ります。谷中小学校を卒業するとすぐ家の仕事をつぎました。

(谷中 三二七三)

〔光輝〕 鍛金工業

田中房吉さん

銀や銅の板を、たたいたりまげたりして、美しい置き物や、お面、お茶の道具などを作っています。

日本工芸会の会員。展覧会などで、賞を受けています。二人のお子さんも、同じ工業家です。(谷中三二二一十八)

33. 霊梅院と初音の森

霊梅院のけいだいに、むかしは大きな森があつて、うぐいすがたくさんいました。そこで、この森は、初音の森とよばれました。寛永寺の宮様は、京都から、とくに声の美しいうぐいすをとりよせて、この森にはなしたそうです。今のコミニティーセンターから天心公園のあたりまでを、むかしは、うぐいす谷とよんでいました。国電のうぐいす谷駅のもととは、谷中なのです。

34. 観音寺の四十七士

古い築地塀のある観音寺は、赤穂の義士が、主君のかたき吉良上野介をうちとるために、ひそかに話し合いをした所です。本堂の前には、四十七士の慰霊塔が立っています。観音寺の当時の住職の兄は四十七士の一人

初音の森とうぐいす谷

(谷中五丁目)

35. 功德林寺の笠森稲荷

笠森稲荷

(功德林寺 谷中七一六九)

功德林寺は、明治十八年にたてられた、谷中では新しいお寺です。このお寺のけいだいは、赤いとりのある、小さなお稲荷さまがあります。笠森お仙で名高い、笠森稲荷です。ここが、江戸時代に、天王寺の笠森稲荷があつた場所なのです。明治維新の時にあつた戦い(戊辰の役)で、笠森稲荷は焼けてしまったため、上野桜木町に移されました。そこで、明治の終わりにころに、お稲荷さまがたてられたのです。

四十七士慰霊塔

(観音寺 谷中五一八一二十八)



36. 観音寺の築地塀

かなり古くから立っていますが100年ほど前に作り直されました。

37. 全生庵

山岡鉄舟墓

(全生庵 谷中五一四一七)
寺の名「全生庵」は鉄舟の戒名からとる。

山岡鉄舟のたてたお寺、全生庵には、山岡鉄舟のほかにも、三遊亭
円朝や、作曲家の弘田竜太郎（二八九二〜一九五二）「小諸なる
古城のほとり」や「雀の学校」などを作曲）などの墓があります。

山岡鉄舟（一八三

六〜一八八八）は、

江戸に生まれました。

北
辰 刀流で名高い千葉

周作に剣を学び、後

に無刀流をあみだし

ました。剣の達人で

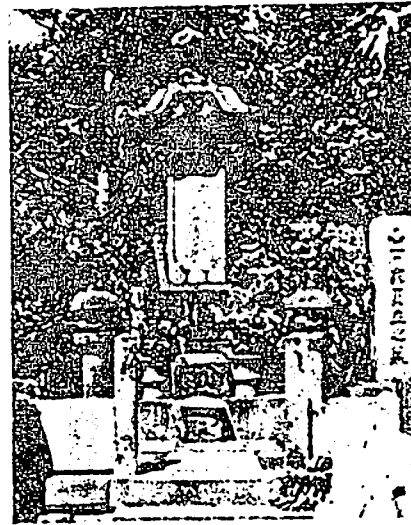
したが、一人も殺さ

なかったといわれま

す。また、書道も学び、

多くの作品を残してい

ます。



三遊亭円朝墓

(全生庵 谷中五一四一七)

山岡鉄舟と親しかった、三遊亭円朝（一八三九〜一九〇〇）は
明治時代の落語家。「怪談牡丹灯笼」や「塩原多助」など、たく
さんの話を自分で作って演じました。

円朝まつりとおばけ --- 毎年8月、円朝が集めたお化けの絵の掛軸が公開されている。

円朝と“無舌居士” --- 円朝は鉄舟に勧められて禅の修業をはじめ、
漸は口でするものでなく心でするものとの悟りを得て、法名(戒名)を「無
舌居士」とした。

中曽根康弘と全生庵 --- 中曽根氏は毎週土曜日に参禅しに来る。

<p>中 曽 根 の 百</p>	<p>午前9時5分、公邸に神谷 一雄・松久社長、松本誠也パ イオニア社長、野田毅代議士、 ウィーンフィルハーモニー交 響楽団指揮者のロリン・マゼ ール夫妻、浅利慶太氏。 午後0時55分、総院通用口 民営ボスターの写真撮影(東 京・築地の電通)。2時15分、 官邸前。3時、国会前。参院 補助金等関係特別委員会。 6時10分、公邸へ。8時15 分、東京・谷中の「全生庵」 總、座禅。10時15分、公邸に 戻る。</p>	<p>26日(土曜日)</p>
---	--	-----------------

37. 大円寺

笠森おせん

(大円寺 谷中三十一一)

学校の向かい側にある大円寺は、古くまつをたぎ合わせたよ
うな、めずらしい建築のお寺です。右に稲荷神社、左は仏式。
このお寺にまつである稲守稲荷は、江戸時代から、ひふの病
気にききめがあることで有名でした。病気がなおったら、土のだ
んごをおそなえしたそうです。

けいだいには、浮世絵にえがかれている、笠守お仙の石碑と、
お仙をえがいた、鈴木春信の石碑がたっています。

小説家の永井荷風(一八七九—一九五九)は、お仙をしのんで、
大円寺に石碑をたてました。大円寺の稲守稲荷が、むかしから有
名だったために、「笠守」と「稲守」とを、まちがえたのでし
う。お仙のいた店の近くにあった笠守稲荷は、今の功德林寺の稲
荷をまつっている場所にありました。

笠守お仙は、とても美人だったので、鈴木春信が浮世絵にえが
きました。それが
とても美しくえが
けていたので、江
戸中のうわさとな
り、しばいにもな
りました。

手まり歌にもな
って、歌いつがれ
てきています。

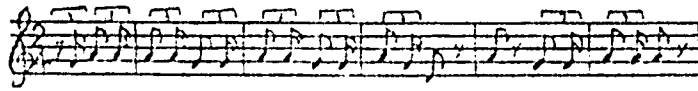


こんな江戸川柳がある。「大たわけ 茶屋で腹を わるくする」。
明和年間(1764~72)、感応寺(現天王寺)境内内の笠森稲荷
前の水茶屋錦屋に、江戸八百八町の男たちを通いつめさせた娘が
いた。その名は『笠森お仙』。その美しさは、当代一のうるさが
た、戯作者の蜀山人をして「江戸一番の器量良し」つまり今でい
う「ミスお江戸」とうならせ、錦絵に描いた絵師・鈴木春信の名
を一躍、世に高めたほどである。手まり唄「向う横町のお稲荷さ
ん」に、今もその名を残すお仙だが、実像はいまもって定かでない。

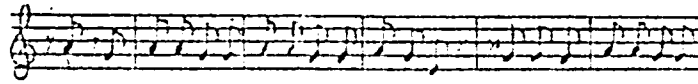
谷中は 辻ごとに立ち並ぶ寺と細い路地は今も昔のまま。その
ような細い路地裏から生まれたのが、手まり唄「向う横町のお稲
荷さん」。江戸の昔から歌い継がれ、童唄の傑作とされる。

向う横町のお稲荷さんへ ざーとおがんでお仙の茶屋へ
腰をかけたらしぶ茶を出して しぶ茶よこよこ横目で見たら

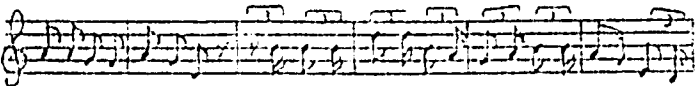
王³のだんごか 米^{こめ}のだんごか おだんごだぁあんご
 このだんご 犬にやろうか 猫にやろうか
 とうとうとんびにさらわれた
 ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな、やあ、
 ここの、とお……



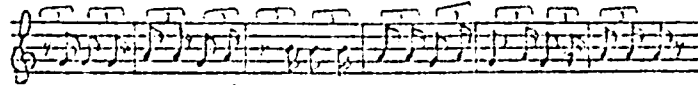
むこうよこちよのおいなり きんへ いっせん あげて



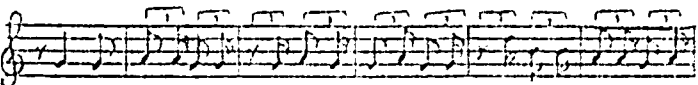
ちやと おがんで おせんのお茶がへ こしを かけたら



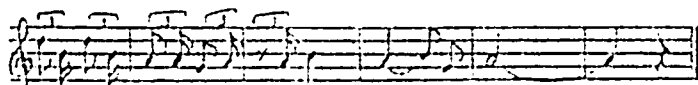
しぶ茶をだして しぶ茶よこよこよこめでみたらば



こめのだんごが つしのだんごかおだんごだんご



このだんごを いぬにやろうか おこにやろうか



とうとうとんびにさらわれた

春信の笠森お仙

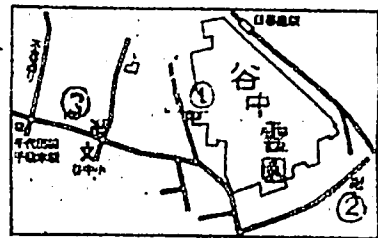


丸まげ、うりざね顔、
 夢をみるようなまな
 ざしのお仙である

「お仙」の名が知られるようになったのは、明和2年(1765)
 当時の俗謡を集めた「大黒舞」の中に「ハツ、谷中の色娘」とあ
 るのが始まりとされる。この時、お仙は15歳。お仙の名は瞬く
 間に江戸市中に広まり、物見高い江戸っ子は列をなして、お仙の
 水茶屋に押しかけたという。明和5年、蜀山人(大田南畝ととい
 い、狂歌・洒落本・黄表紙で活躍)はその様子を「谷中笠森稻荷
 地内、水茶屋女お仙十八歳美女なりとて、皆人見に行。家名鍵屋
 五兵衛といふ。……絵草紙、双六、よみ売等出る。手拭に染まる
 と書いた。その騒ぎに、春信の錦絵(多色刷りの浮世絵)がお仙人
 気に拍車をかける。春信は、お仙の姿を一枚絵「笠森おせん」に
 描き続けた。江戸っ子は先を争って買い求め、絵師春信の名声は

お仙の美貌とともに世に出て、ますます広まる。こうしてお仙はわずかに2・3年のうちに春信の名声とともに江戸中に知れ渡った美人だが、評判になって間もなく、明和7年に20歳で御家人倉地政之助にとつぎ、その姿を笠森稲荷の水茶屋から消している。当時、浅草寺境内の楊子店柳屋の看板娘・お藤とその美しさを競ったが、蜀山人は「阿仙阿藤優劣弁」と題した戯文を発表。浅草より辺ひな谷中で、これほどの人気があるという理由より、お仙の方に軍配を上げて、「江戸一番の美女」つまり、ミスお江戸とした。なお、お仙は76歳まで生き、墓は中野区昭和通りの正見寺にある。

谷中には、三つの「笠森稲荷」がある。お仙の茶屋があった場所とされる功德林寺の笠森稲荷、当時の笠森稲荷のご神体をまつっている養寿院の笠森稲荷、鈴木春信の碑や笠森阿仙乃碑のある大円寺の笠森稲荷の三つである。



① 功德林寺 --- 感応寺(現天王寺)境内

西の中門前にあった福泉院の笠森稲荷がお仙の笠森稲荷で、明治維新の戊辰の役で焼失。その後、ここに明治18年功德林寺が建てられ明治の終りに、この境内内に笠森稲荷が建てられたのである。

- ① 功德林寺
- ② 養寿院
- ③ 大円寺

② 養寿院 --- 戊辰の役で笠森稲荷は焼けたが、ご神体は今も寛永寺の子院、桜木町の養寿院内に家康守護の吒呌尼天としてまつられている。

③ 大円寺 --- 大円寺の「かさもり稲荷」は、瘡を守る意味の、「瘡守稲荷」として非常に繁盛した。デキモノや皮膚病、梅毒などにご利益があると信じられていた。願かけには土の団子を供え、治ると願うほどきに、米の団子をお礼参りに供える習わしであった。それがいつのまにか笠森稲荷と混

同され、大円寺には 大正8年(1919)、春信の百五十回忌に永井荷風による「笠森阿仙乃碑」、笹川臨風による、「錦絵開祖 鈴木春信」の碑の二つが建っている。

錦絵開祖 鈴木春信

明治七年六月十五日、錦絵に一新紀元を開きたる稀代の巨匠鈴木春信はみまかりぬ。享年四十余り俗称も詳かならねば其墓所の在りかさへも知れず。しかはあれども其制作は今に残りて内外鑑賞家の嘆賞措く能はざるものあり、優婉にして典雅賦彩は華やかならずして上品に画くところ韻致に富み、例へば腕にかすむ春の夜の夢かとはかり淡きが中に花の香の幽かに響く風情あり。其感化は独り我が芸術の上のみならず遠く西洛國のあなたまで及びて今に尽きず。今茲同志の者ども其百五十回忌辰を當まんとするに際し、よく今と古と其所を異にすとも、此大芸術家が屢題材としたる江戸の艶女笠森お仙に因縁深き谷中笠森稲荷を勧請せる大円寺の瑩域に碑を建て以て我等が渴仰讚美の意を捧ぐ。

大正八年六月

笹川臨風識

笠森阿仙 碑

女ならでは夜の明けぬ日の本の名物五大州に知れ渡るもの錦絵と吉原なり、笠森の茶屋かぎや阿仙春信の錦絵に面影をとどめて百五十有余年嬌名今に高し今年都門の粹人春信が忌日を選びここに阿仙の碑を建つ。時恰も大正己未夏六月蝶のうまい頃。

荷風小史識

この史跡めぐりの資料を作成するにあたって、次にあげる本や新聞を使用しました。感謝いたします。

- 「上野浅草むかし話」 末武芳一著 三誠社
 「谷中スケッチブック」 森まゆみ著 エルゴ出版
 「地域雑誌 谷中根津千駄木」 編集人 森まゆみ 谷根千工房
 其の七

「わたしたちの谷中」 台東区立谷中
 創立八十周年記念誌 小学校

朝日新聞 S59・4・7と4・8 (長谷川一夫)
東京新聞 S61・2・7 (なんとなくイマの谷中)
読売新聞 S58・10・3 (笠森お仙)
" S60・4・1 (天王寺五重塔跡)

忍城物語 大沢俊吉著 行田市役所

その他 多数

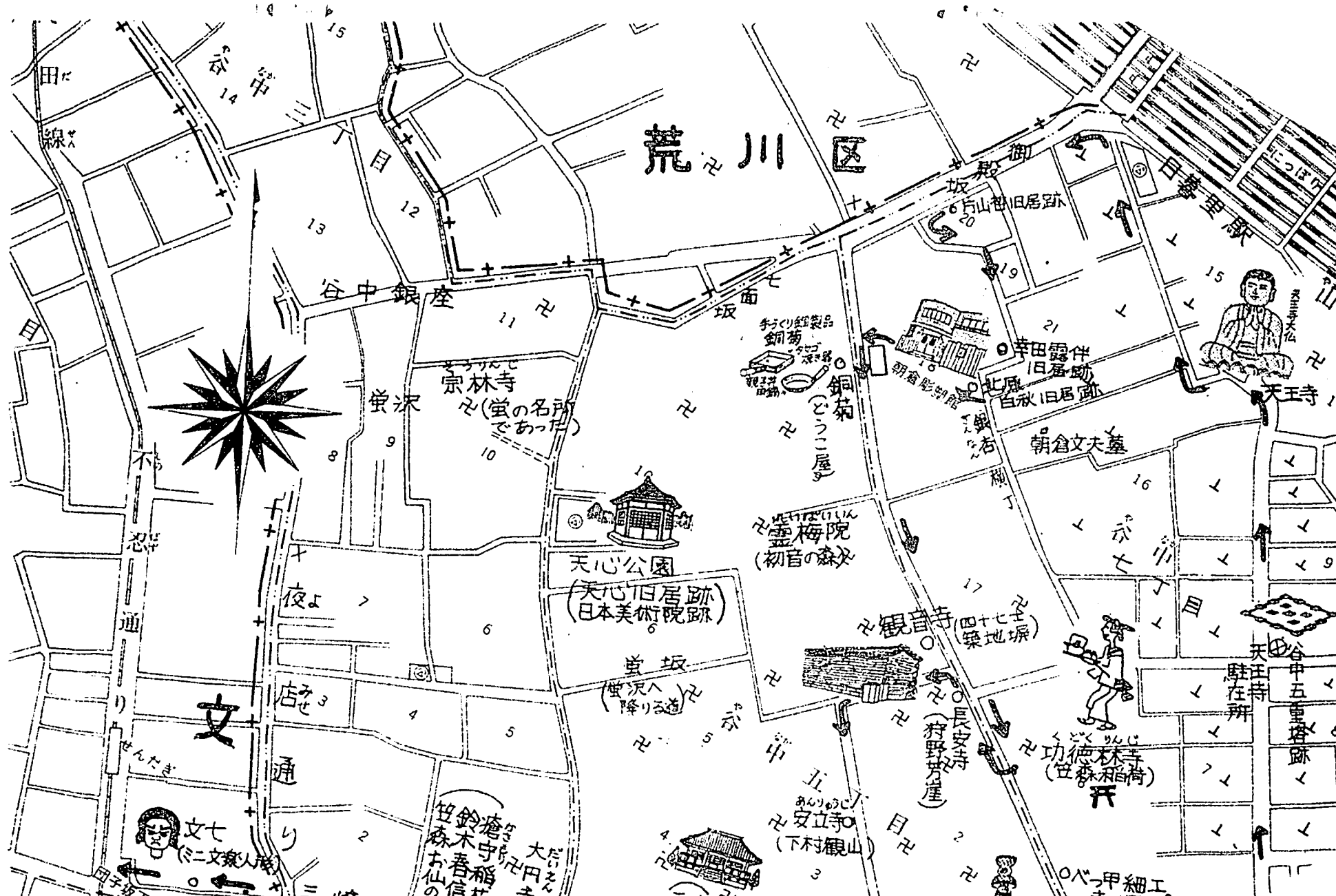
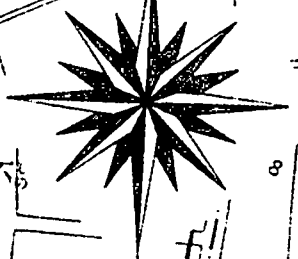
“雑感”

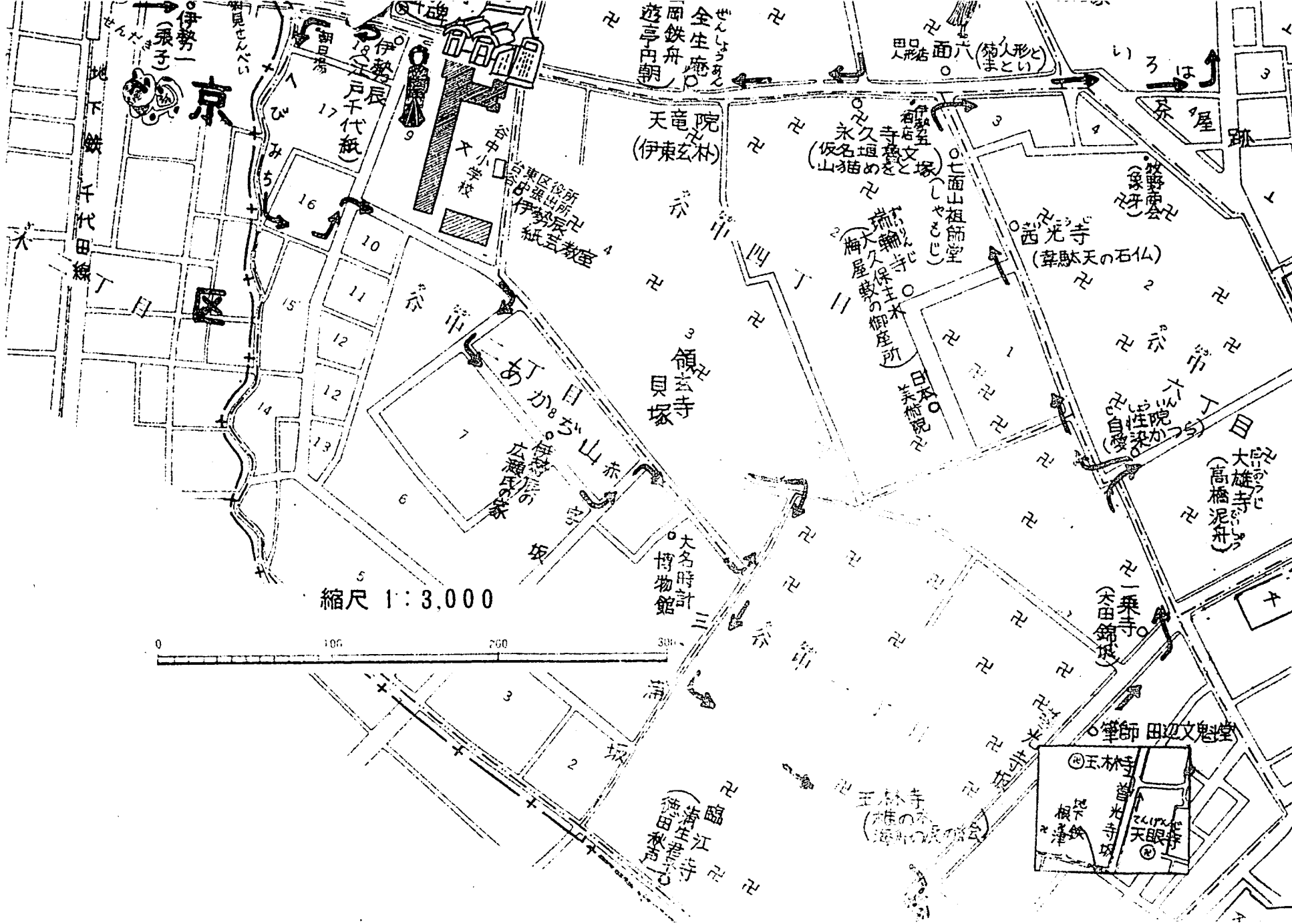
谷中は史跡の大変多い所です。1日ではとてもまわりきれません。いつの日か 天心公園を中心とした芸術関係や谷中墓地、谷中三丁目方面の史跡めぐりを計画したいと考えております。また、谷中七福神めぐりも実現するとすばらしいなと思っております。

第144回の谷中方面の史跡めぐりを参考に、個人で、あるいは小グループで じっくりと谷中の散策をおこなってみてはいかがでしょうか。今回と違った感動をおぼえたり、いくつかの新発見に出くわすことでしょうか。

昭和61年4月28日

荒川区

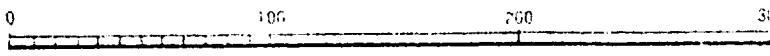




京

区

縮尺 1:3,000



天竜院
(伊東玄村)

永久寺
(坂名猫めと山)

大光寺
(韋駄天の石仏)

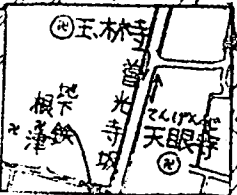
領玄寺
貝塚

あか山赤坂
梅屋敷の家
大瀬戸の家

大名時計
博物館

一乗寺
(大田錦坂)

筆師 田辺文魁堂



伊勢一
(須子)

伊勢長
戸千代紙

台東区役所
台東出張所
伊勢長紙式教室
小中学校

七面山祖師堂
(しやまこじ)

瑞輪寺
梅屋敷の御座所
大久保生木

被野神会
(象牙)

大雄寺
(高橋泥舟)

徳田寺
徳田水戸

五木寺
(徳の)

天目寺